

## 英語教師のための 第二言語習得論入門

白井恭弘 著

四六判 168pp.  
本体1,200円+税

山本敦子



科学的アプローチに基づいた英語教育の処方箋——教師としてこれだけは知っておきたい

「学校行事や生徒指導が忙しくて教材研究どころではない」と慣れ親しんだ文法訳読式の授業をなかなか変えられないでいる英語教師が「忙しくても肩肘張らずに」すぐに読めるように、とエッセイ風書かれてあるこの本はとにかく読みやすい。著者は、アメリカ合衆国ペンシルバニア州ピッツバーグ大学言語学科長として第二言語習得研究の第一線で活躍している白井恭弘氏である。アメリカの大学で言語学を研究しているからといって、教育現場から離れた抽象理論に埋没しておられるわけではなく、7年間の公立高校での指導経験が「僕の原点」と、教師が何に悩みどういう現実的な壁があるのかもしっかりと踏まえて書かれているので、我々教師の心の琴線にさっと響いてくるのであろう。読み進めるにつれて、日本人の英語力向上への著者の熱い思いと、「遠いのに近い」著者の存在感が、講演記録をもとに書き下ろしたという語りかけるような文体とあいまってじわじわと伝わってくる。

第1章「第二言語習得論のエッセンス」は「これまで第二言語習得研究で明らかにされてきたことについて、英語を教える人に最低限押さえておいてほしい内容」がまとめてあり、一般読者向けに書かれた前著『外国語学習の科学』（岩波新書）の内容にさらに新しい研究成果が盛り込まれている。第2章「SLAからみた日本の英語教育」は「現在の日本の英語教育のあり方、またこれからの方向性」についての筆者の考えを、さらに第3章～第6章では、小中高の学校教育、そして大学生、社会人の英語教育など個々の現場に即して進むべき方向性を示してくれる。

例えば、小学校外国語活動で身の回りの物の名詞を覚えさせる活動や片言のアウトプット活動に満足してしまいがちな指導のあり方、綴りの正確さや「簡単には身につかない」3単元の-sなどの形式について目くじらを立ててしまう中学校英語教師のあり方に大きく警鐘を鳴らしている。特に第5章「高校英語教育のこれから」においては、新学習指導要領の「英語の授業は英語で」の基本的なとらえ方を「英語が教師も生徒も両方の中で activate される状況」を作ることで、使える英語を身につけることをめざすこととしている。しかし Speaking 重視の授業は入試の制約、クラスサイズ、教師の指導力の3点において困難が伴うことは我々の認識に違わず著者によっても指摘されている。そこで、著者が現場教師時代に高校の英語授業で行った「インプットモデルに基づいた実践例」が当時の実践報告とともに紹介されている。1年間で英語の偏差値が10上がったというその指導法は、当時週1時間あった文法の授業をすべてサイドリーダーを読む時間に充てて年間10冊の本を読ませ、文法学習は家庭学習に回したというものである。これによって input 量は7,540語から約20,660語へと決定的な差を生み、それが目を見張る結果を導いたものであろう。

25年以上前に書かれたこの実践報告の時代と違って、現在では国語教育における読書活動そのものの計り知れない効果が国によって認められ、「子どもの読書活動の推進に関する法律（平成13年）」のもと朝読書などによる自主的読書活動や読み聞かせの活動が小中学校教育に広く普及してきている。本書で触れられている「自分の能力や興味に応じて自由に本を選んで読む自主的読書教育」の環境を、言語を日本語から英語に変えて与えるといった実践も難しいことではないだろう。さらに教師が「魅力ある教材を選び」「レベル、ヒントの与え方などを工夫して生徒が確実に理解している状況を作りながら」本書で紹介されている L-R Reading の方法による Communicative Reading により実際のコミュニケーション能力に繋がる Comprehensible Input を心がけて導入していけば、文法中心の指導が到底及ぶことのできない成果が期待できるものと思われる。

（やまもと あつこ・愛知県小牧市英語教育推進委員）